

第 155 回埋蔵文化財セミナー

京都府内の 発掘成果速報

令和6年8月4日（日）
永守重信市民会館



川上南古墳群

「福知山市 川上南古墳群の発掘調査」

福知山市 地域振興部 文化・スポーツ振興課
主任 鷺田 紀子 氏

「城陽市 芝山古墳群の発掘調査」

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課 副主査 小泉 裕司

「京丹後市 カンジョガキ遺跡の発掘調査」

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課 調査員 松谷 友香

「宮津市 史跡丹後国分寺跡の発掘調査」

京都府 教育庁指導部 文化財保護課
副主査 桐井 理揮



史跡丹後国分寺跡



カンジョガキ遺跡



芝山古墳群

第155回埋蔵文化財セミナー

京都府内の発掘成果速報

日 程

- 14時00分 開会あいさつ
(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
常務理事・事務局長 阿部篤士
- 日程説明(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課課長補佐兼企画調整係長 筒井崇史
- 14時10分 報 告 1
「福知山市川上南古墳群の発掘調査」
福知山市地域振興部
文化・スポーツ振興課主任 鷲田紀子氏
- 14時40分 報 告 2
「城陽市芝山古墳群の発掘調査」
(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課副主査 小泉裕司
- 15時10分 休 憩
- 15時20分 報 告 3
「京丹後市カンジョガキ遺跡の発掘調査」
(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課調査員 松谷友香
- 15時50分 報 告 4
「宮津市史跡丹後国分寺跡の発掘調査」
京都府教育庁指導部
文化財保護課副主査 桐井理揮
- 16時20分 閉 会

主 催 京都府教育委員会
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
会 場 永守重信市民会館(向日市民会館)

福知山市川上南古墳群の発掘調査

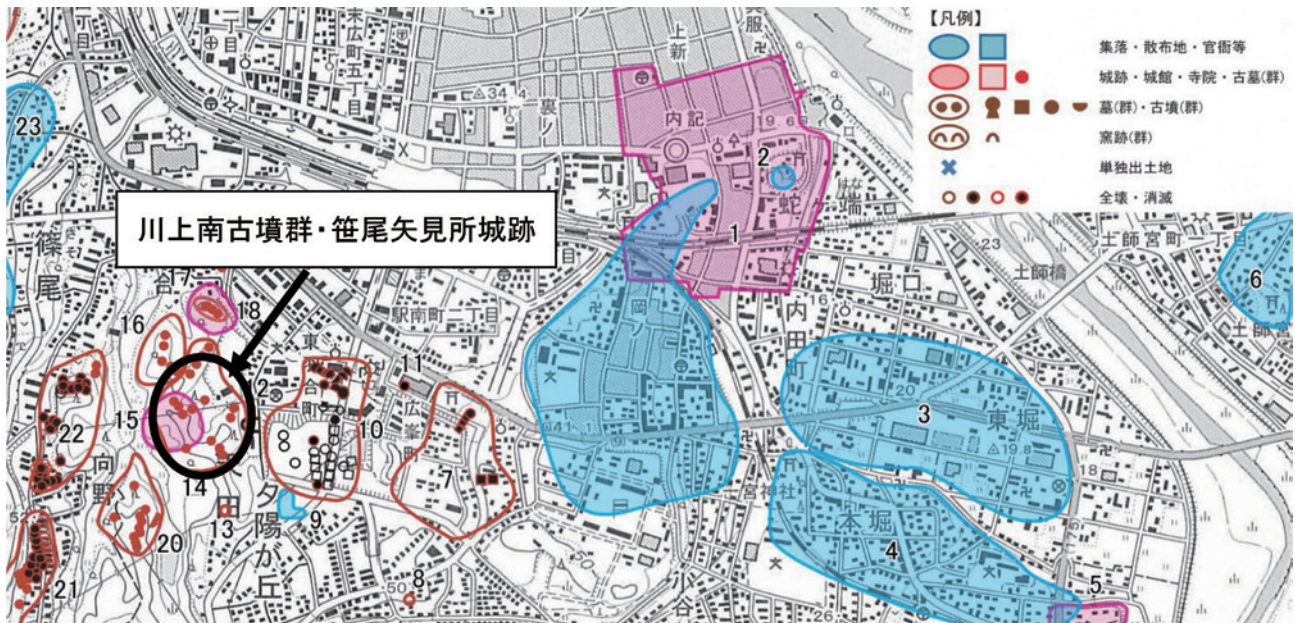
福知山市地域振興部文化・スポーツ振興課
鷺田紀子氏

1. はじめに

川上南古墳群は福知山盆地の南西部に位置し、由良川に流れ込む弘法川右岸の丘陵上に立地する総数15基からなる古墳群です。また、川上南古墳群の南西側の一部に中世の山城跡とみられる笹尾矢見所城跡の存在が『京都府中世城館跡調査報告書』などに示されています。これらの遺跡が位置する丘陵上は眺めが非常に良く、福知山の市街地を一望することができます。

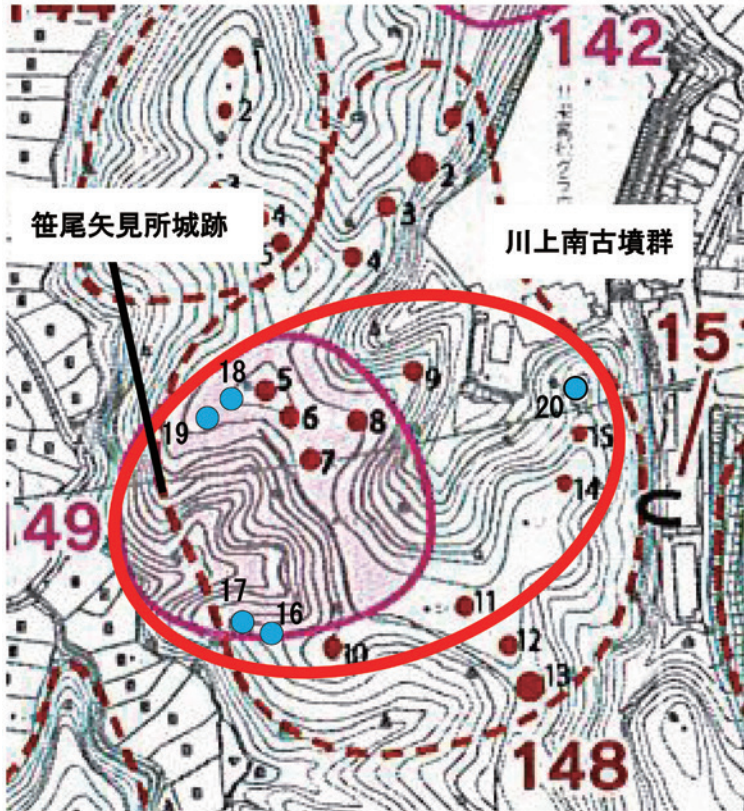
周辺には「景初四年」銘を持つ盤龍鏡の出土で知られる広峯15号墳や寺ノ段古墳群のほか、川上古墳群や向野古墳群、向野西古墳群、持原古墳群など数多くの古墳が存在し、笹尾遺跡など集落の存在が予想される遺跡もあります。これまでに広峯古墳群や寺ノ段古墳群のほか、向野古墳群や向野西古墳群では開発工事に伴う発掘調査が実施されています。

今回は民間の開発工事に伴い、川上南古墳群15基のうち9基と笹尾矢見所城跡の発掘調査を実施しました。



- 1. 福知山城跡(横山城跡) 2. 福知山城下層遺跡 3. 本堀遺跡 4. 東堀遺跡 5. 水内城跡 6. 土師遺跡
- 7. 寺ノ段古墳群 8. 養越古墳 9. 広峯遺跡 10. 広峯古墳群 11. 西岡古墳 12. 稲子谷窯跡
- 13. 稲子谷古墳 14. 川上南古墳群 15. 笹尾矢見所城跡 16. 川上古墳群 17. 羽合ノ段古墳群 18. 笹尾羽合城跡
- 19. 羽合古墳 20. 持原古墳群 21. 向野西古墳群 22. 向野古墳群 23. 笹尾遺跡

第1図 周辺遺跡分布図



第2図 調査対象地

2. 調査成果

調査対象となったのは、笹尾矢見所城跡と川上南古墳群15基のうち、5～11号墳、14、15号墳の9基のほか、調査前の現地踏査で確認した古墳状の高まりや尾根上の平坦な地形をしている場所（水色の丸印）5か所（16～20）です。

調査の結果、5号墳と10号墳が古墳であることが確認されました。10号墳は墳頂部が削平されていたため埋葬施設などは確認できませんでしたが、5号墳は木棺直葬の埋葬施設を持つ円墳であることがわかりました。また、調査前に古墳状の高まりを確認した場所



写真1 5号墳埋葬施設(南東から)

のうち、5号墳に近接する2か所(18・19)が古墳であることも新たにわかりました。18は攪乱^{かくらん}を受けており、詳細はわかりませんでした。19は木棺直葬の埋葬施設を持つ方墳(19号墳)であることが確認できました。

笹尾矢見所城跡については調査の結果、明確な山城の痕跡を確認することができませんでした。次に5号墳と19号墳の詳細を紹介します。

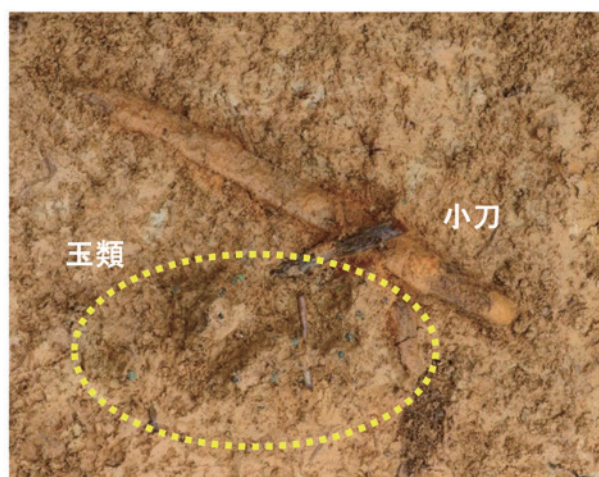
(1) 5号墳

5号墳は直径約17m、高さ約3mの円墳で、葺石^{ふきいし}や埴輪^{はにわ}、周溝等の外表施設はありませんでした。古墳が構築された状況については、地山^{じやま}を整形して造られていましたが、一部が削平を受けていました。

埋葬施設は一つで、東西方向に主軸をもち、墓壙の規模は長さが4.8m、幅が1.9mです。組合式^{くみあわせしき}木棺を用いた木棺直葬墓で、木棺の規模は長さ4.4m 幅1.1m、小口の粘土塊に石を用いているのが特徴です。この小口に粘土塊を用いる方法は、この地域では6世紀中頃を中心に池の奥古墳群(3



西側小口



小刀・玉類出土状況



西側小口付近 棺上遺物出土状況



棺外 須恵器出土状況

写真2 5号墳埋葬施設各部分

号墳、6号墳、7号墳)や向野古墳群(22号墳)、稲葉山古墳群(1号墳、4号墳、5号墳)などで同様の類例が確認できます。

出土遺物は棺上に置かれていたと考えられる土師器の高杯^{たかつき}1点と壺1点、須恵器^{すえき}の提瓶^{ていへい}2点、鉄製品の刀子1点と鏃^{そく}2点、木棺内は鉄製品の刀1本と小刀1本のほか、小刀の周辺からは玉類(ガラス小玉)が81点見つかっています。小刀や玉類が出土した位置は、棺上に置かれていたのと考えられる須恵器の提瓶2点が出土した位置のちょうど真下になります。

また、棺外の出土遺物として、須恵器が9点出土しています。須恵器は杯身^{つきみ}4点、杯蓋^{ふた}4点、脚付の高杯が1点の計9点で、杯身と杯蓋のセット関係がわかるものが3セットありました。これらの須恵器は木棺に沿うようにまとまっており、別の入れ物に納められた状態で埋納されていた可能性が考えられます。

埋葬時期については、須恵器の年代から6世紀中ば(前半)頃と考えられます。

(2)19号墳(仮)

調査前の踏査において、古墳状の高まりや尾根上の平坦な地形をしている場所の一つとして調査を実施し、約17m×10m、高さ約0.5～1.5mの方墳であることを確認しました(仮番号として19号墳とします)。5号墳と同じく、葺石や埴輪、周溝等の外表施設は確認できませんでした。また、古墳の構築状況については、地山を整形して作られています。

埋葬施設は1つで、東西方向に主軸を持ち、墓壙の規模は長さ4.1m、幅2.8mです。組合式木棺を用いた木棺直葬墓で、木棺の規模は長さ3.3m、幅1.0mを測り、小口の粘土塊に石を用いる方法は5号墳と同様です。また、床面には赤色顔料^{がんりょう}も確認できました。

出土遺物は須恵器の杯身3点と杯蓋1点、土師器の壺が3点、鉄鏃が5本で、すべて棺上に置かれていたと考えられます。鉄鏃については、5本のうち4本は崩れた粘土塊が被った状態で出土しました。また、土師器の壺は、西側小口から2点、東側小口から1点出土しています。

埋葬時期については、須恵器の年代から6世紀中ば(後半)頃と考えられます。

3. まとめ

今回の調査により、川上南古墳群は丘陵西側にまとまりを持つ古墳群であることが判明し、川上南古墳群の一端をうかがい知ることができました。さらに、副葬品の埋葬状況がよくわかる貴重な成果を上げることが出来ました。

古墳が築造された時期については、出土遺物の内容から考えると、おおよそ6世紀中ば頃に位置づけられます。また、築造の順番としては、尾根の最も高い場所に位置する5号墳が最初に築かれ、その後尾根を下るように18号墳(仮)、19号墳(仮)が築造されたと考えられます。

確認された5号墳と19号墳の各埋葬主体部は、いずれも小口の粘土塊に石を用いるなど共通点



19号墳埋葬施設（北東から撮影）



東側小口（南から撮影）



西側小口（東から撮影）

写真3 19号墳埋葬施設全景及び小口部分

が見られ、この周辺で力を持っていた同族の有力者の墓である可能性が考えられます。

川上南古墳群の周辺には、丘陵西側に向野古墳群、向野西古墳群や篠尾遺跡などが存在します。これまでの発掘調査により、向野古墳群は木棺直葬を主体とした6世紀初頭前後から6世紀後半の古墳群、向野西古墳群は横穴式石室を主体とする6世紀後半から7世紀前半にかけて造墓活動が行われていたことがわかっています。川上南古墳群は横穴式石室が主流となる直前の古墳群である可能性が高く、この地域を基盤とした集団や古墳群の変遷を考える上で貴重な資料と考えられます。

(参考文献)

福知山市教育委員会1974『向野西古墳群発掘調査概要報告書』

福知山市教育委員会1981『向野西古墳群発掘調査概要報告書』

山城考古学研修会1983『丹波の古墳Ⅰ－由良川流域の古墳－』

福知山市教育委員会1985『池の奥古墳群』

福知山市教育委員会2003「向野古墳群」『福知山市文化財調査報告書』第45集

福知山市教育委員会2010「向野古墳群」『福知山市文化財調査報告書』第57集

福知山市教育委員会2016『福知山の遺跡紹介ガイドブック』

城陽市芝山古墳群の発掘調査

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
小泉裕司

1. はじめに

芝山遺跡は、城陽市のほぼ中央部にある東から西へ延びる丘陵上に位置し、東西約950m、南北約840mの範囲に広がる集落遺跡です。これまでの調査で、古墳時代前期の小規模な集落や古墳時代後期～平安時代初めの大規模な集落が確認されています。奈良時代前期には、口の字型に整然と配置された官衙的な掘立柱建物群が造営されます。

芝山遺跡内では小規模な古墳が複数検出され、芝山古墳群として取り扱われるようになりました。これまでの調査で4世紀前半～6世紀末に築造された5～27mの方墳や円墳が39基確認されています。また、芝山古墳群内には4世紀後半～5世紀初めに築造された梅の子塚古墳群(前方後円墳2基、1号墳全長約87m、2号墳全長約65m)があります。

今回の調査は、第22次調査になります。

2. 調査の概要

今回の調査区は、丘陵南東部の尾根上に位置し、令和2年度の第21次調査V-5地区の南側にあたります。調査では、第21次調査で確認されていたV-2号墳の東側周溝と、一部が上下に重なる2基の埋葬施設(埋葬施設1・埋葬施設2)を検出しました。

東側周溝は、幅が3.1～4.6m、深さが25～58cmあり、埋土からは奈良時代の須恵器杯身片や土師器細片が出土しました。周溝は、奈良時代に埋められたようです。

V-2号墳は、第21次調査V-5地区で検出した北側周溝と今回検出した東側周溝から、直径約27mの円墳と考えられます。

上層の埋葬施設2は、南北方向に木棺を直葬したものです。墓壙の大半は削平されていますが、検出面で長さ3.5m、幅2m、深さ20cmを測ります。墓壙の中央部では、長さ3m、幅93cmの組合式木棺の痕跡を検出しました。木棺の内面には、朱が塗られていたようです。木棺内の北端からは、須恵器5点(杯蓋5)と銀製耳環^{じかん}2点^{ほこう}が出土しました。

出土した状況から須恵器5点は被葬者の枕と考えられ、被葬者は北頭位で埋葬されていたようです。木棺内の南端からは、須恵器11点(杯身5、蓋付脚付長頸壺^{ふた}2、壺蓋2、直口壺1、提瓶^{さげべ}1)が出土しました。これらの他に木棺内からは、ガラス製小玉2点や刀子1点^{ちようけいこ}が出土しました。

下層の埋葬施設1も、南北方向に木棺を直葬するものです。北東部分が上層の埋葬施設2の南

西部分と重なります。墓壙は、地山を掘り込んで構築されています。墓壙南端は上部が削平されていましたが、検出面で長さ4.75m、幅2.7m、深さ1.16mを測ります。墓壙の中央部では、長さ3.07m、幅94cm、高さ50cmの箱型木棺の痕跡を検出しました。木棺の内面には、朱が塗られていたようです。木棺内の北端で須恵器4点(杯身2、杯蓋2)と刀子1点、南端で須恵器24点(杯身4、杯蓋4、有蓋長脚高杯3、有蓋長脚高杯蓋3、直口壺2、短頸壺^{たんけいこ}4、短頸壺蓋1、広口壺1、中型甕1、提瓶1)と土師器1点(直口壺1)が出土しました。また、木棺中央付近の西辺沿いで鉄刀(長さ約95cm)1振とガラス製小玉24点が出土しました。棺内からは、これらの他に鉄鏃6点やガラス製小玉10点が出土しました。北端の須恵器は被葬者の枕の可能性があり、被葬者は北頭位で埋葬されていたと考えられます。被葬者が北頭位で埋葬されたとすると、ガラス製小玉がまとめて出土した位置は被葬者の右手首となり、被葬者がガラス製小玉を手玉として装着していたと考えられます。

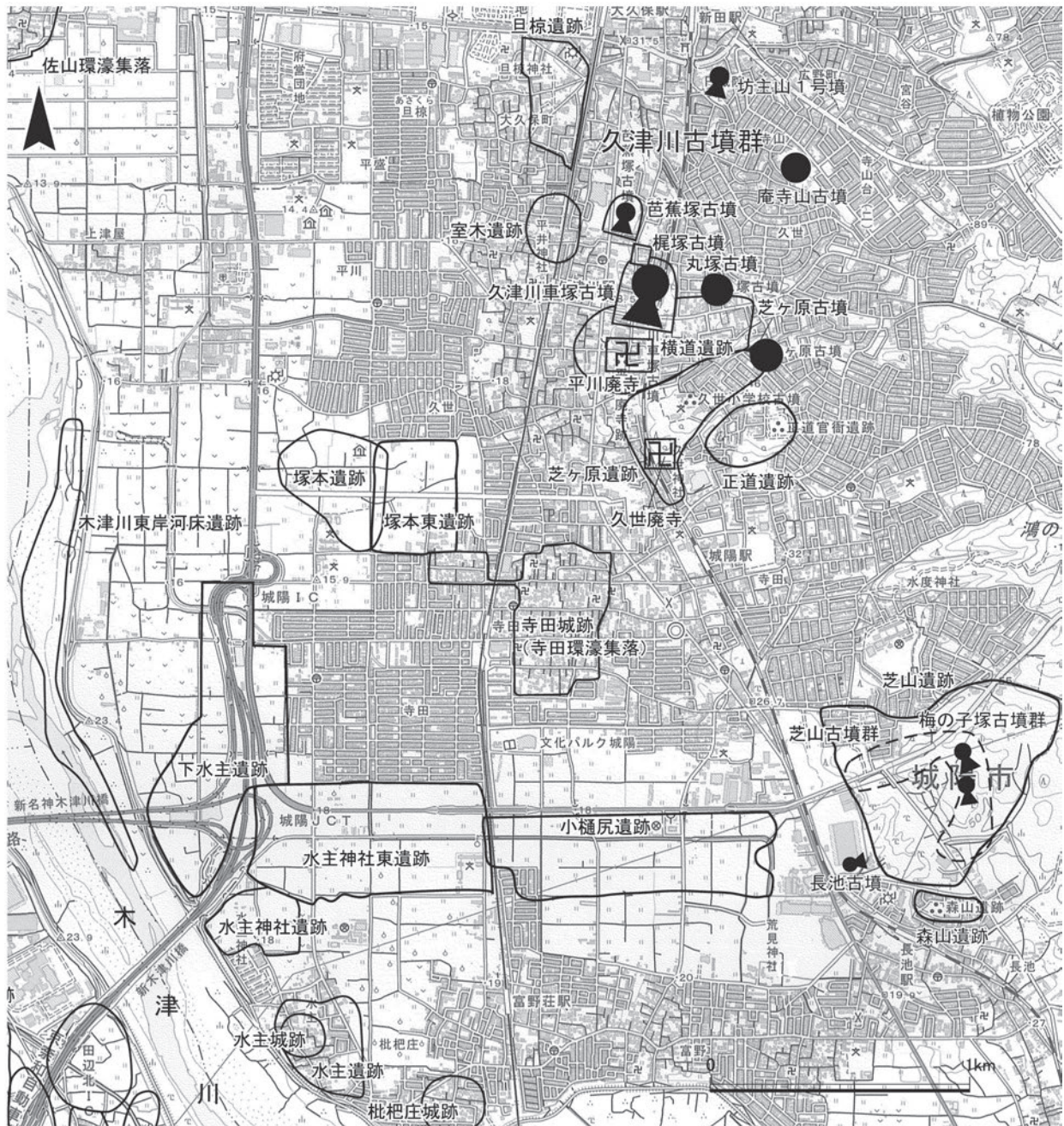
3. 調査の成果

V-2号墳は、墳丘の盛土が低い直径約27mの円墳で、墳丘の中央に一部が上下に重なる2基の木棺直葬の埋葬施設をもつことが明らかとなりました。

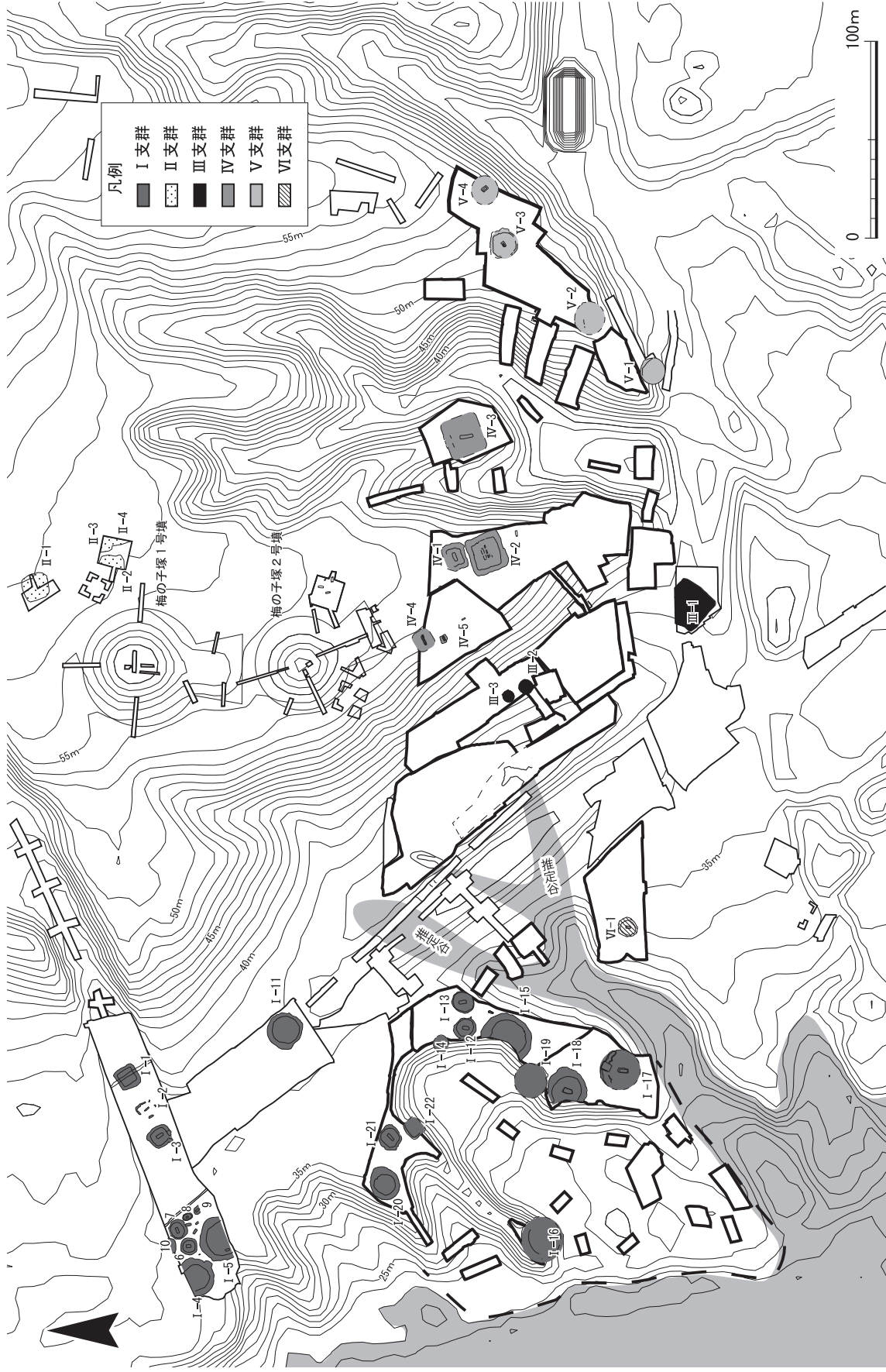
築造時期は、出土した須恵器から古墳時代後期の6世紀中頃と考えられます。埋葬施設1と埋葬施設2から出土した須恵器には時期差が認められないことから、下層の埋葬施設1が構築された後、あまり時を経ずに上層の埋葬施設2が構築されたと考えられます。

複数の埋葬施設が構築される古墳は古墳時代を通じて多くみられますが、V-2号墳のように一部が上下に重複して構築された埋葬施設はあまり知られていません。周辺では、宇治市坊主山2号墳でも2つの埋葬施設が上下に営まれていました。これらの古墳の2人の被葬者は親密な関係にあったと考えられます。

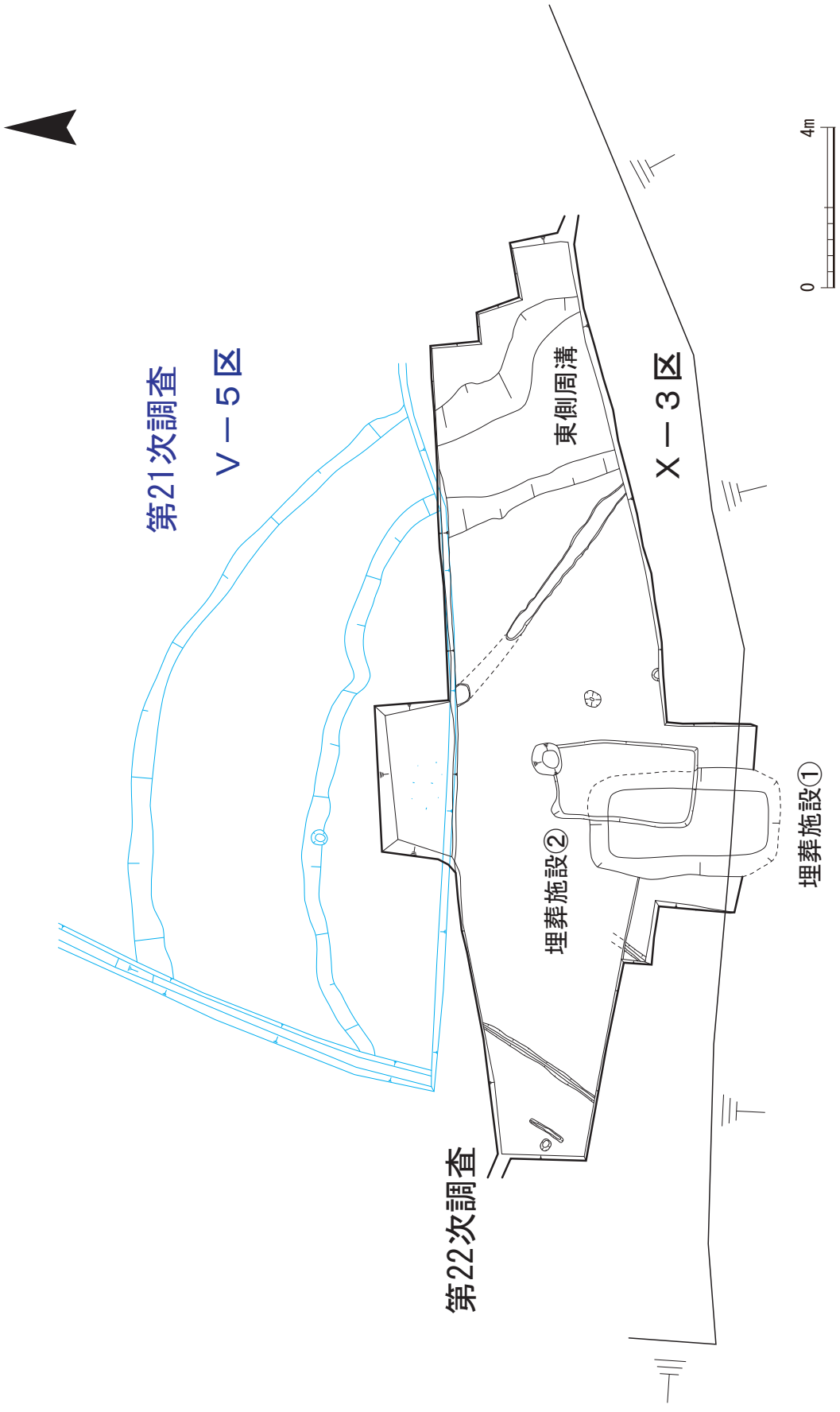
V-2号墳は、芝山古墳群で墳丘規模が最も大きく、埋葬施設1にはこれまでに調査された芝山古墳群の古墳の中で最も多くの須恵器が副葬され、また芝山古墳群では出土例のないガラス製小玉が副葬されていました。これらのことから、埋葬施設1の被葬者は6世紀中頃に芝山古墳群の周辺地域を治めた有力な首長と考えられます。



第1図 周辺の遺跡(1/25,000)



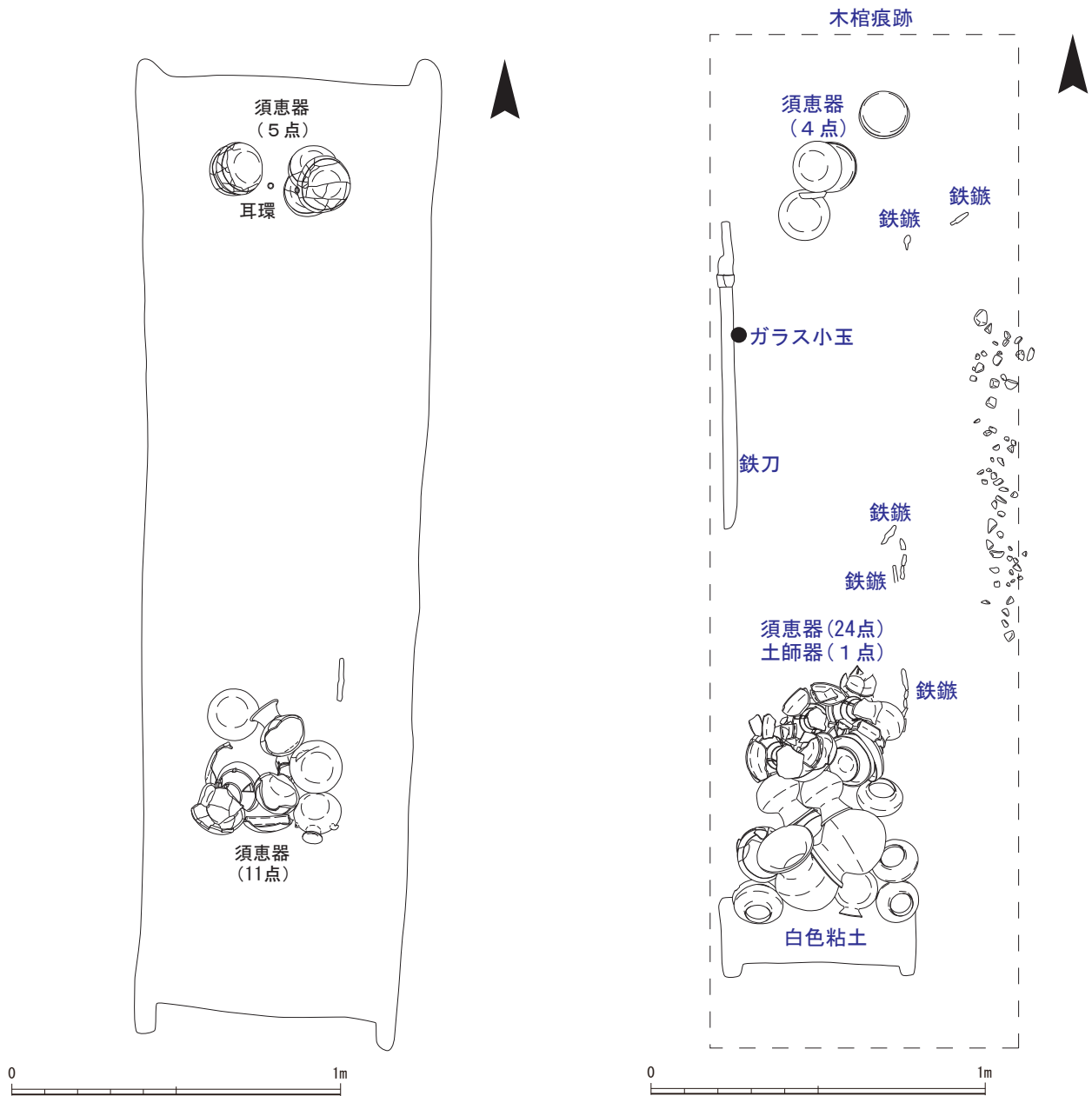
第2図 芝山古墳群分布図



第3図 芝山V-2号墳周辺遺構配置図

上層 埋葬施設 2

下層 埋葬施設 1



第4図 埋葬施設1および埋葬施設2遺物出土状況

京丹後市カンジョガキ遺跡の発掘調査

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

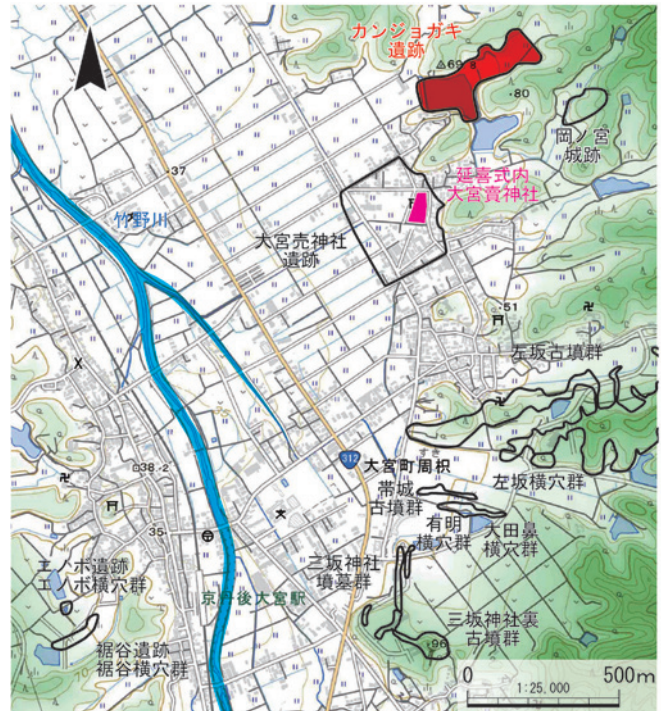
松谷友香

1. はじめに

カンジョガキ遺跡は、京丹後市大宮町周^{すき}積に所在し、竹野川右岸の谷奥部に位置します。国土交通省福知山河川国道事務所が計画する京都縦貫道延伸部分にあたる「一般国道312号大宮峰山道路整備事業」に伴い令和2年度から令和6年度にかけて発掘調査を実施しています。

調査では、縄文時代の流路をはじめ、古墳時代の^{たてあな}竪穴建物、飛鳥時代から奈良時代にかけての^{おうけつぼ}竪穴建物および横穴墓、平安時代の柱列などがみつかっています。

ここでは、飛鳥時代から奈良時代にかけて築かれた横穴墓とその周辺の竪穴建物を中心に紹介します。

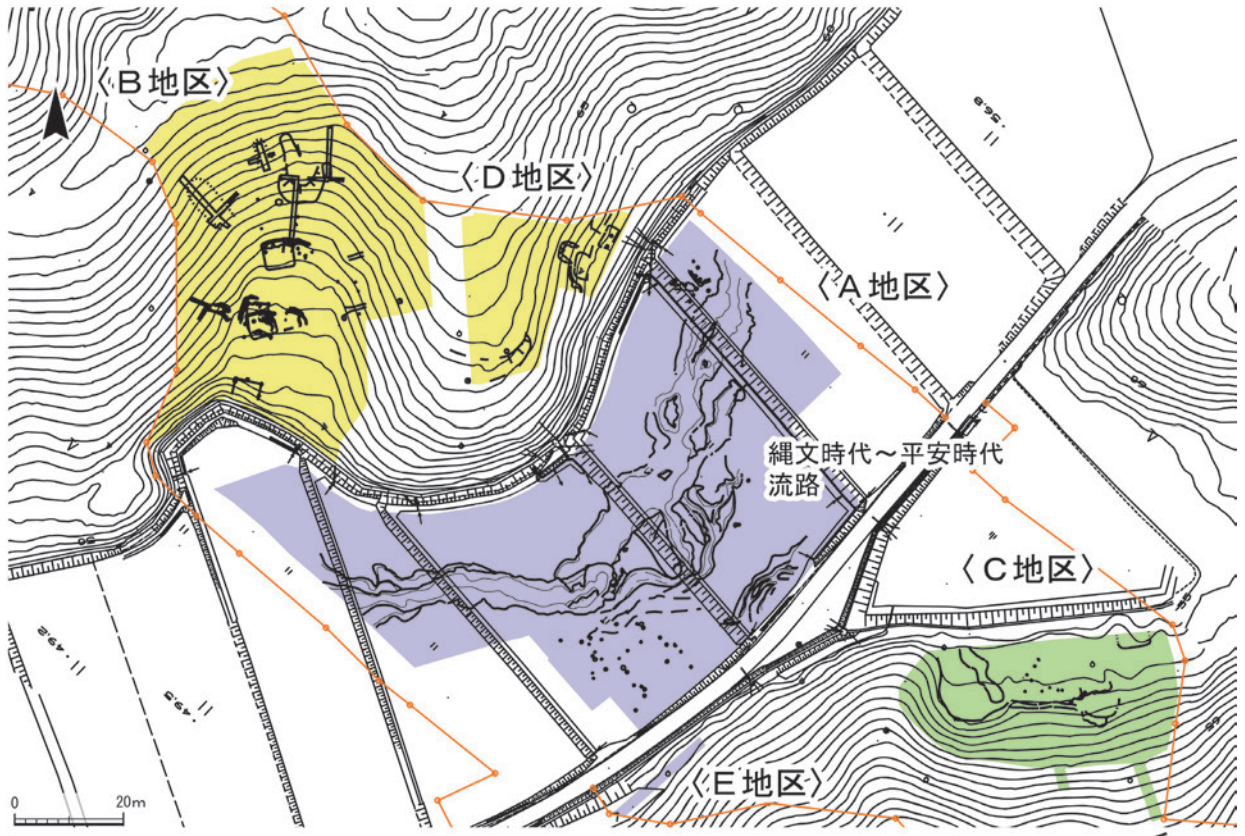


第1図 カンジョガキ遺跡の位置

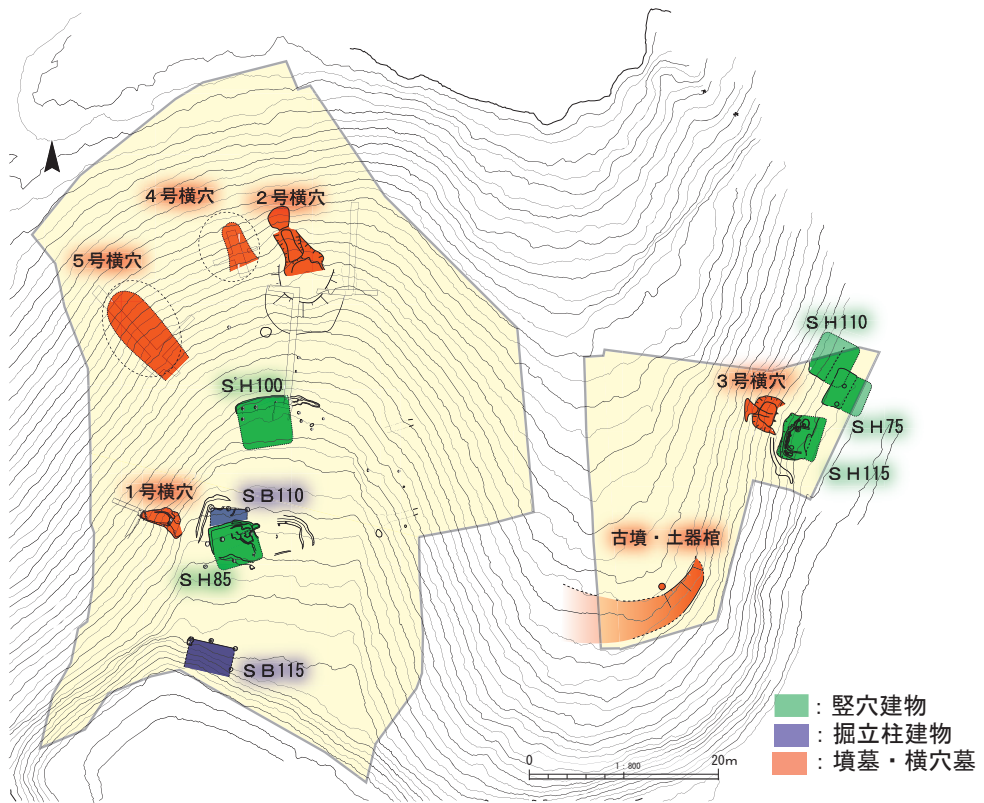
2. 調査の概要

A地区 カンジョガキ遺跡の谷部中央にあたる場所で、縄文時代の自然流路が見つかりました。北東から南西方向に流れる自然流路5条とこれにつながる3条の流路があります。縄文土器、弥生土器、^{はじき}土師器、^{すえき}須恵器、板状の木製品、フイゴ羽口、石^{たたきいし}鍬・^{すりいし}叩石・砥石・磨石・軽石等の石製品、碧玉原石・碧玉製管玉がそれぞれ少量出土しました。縄文土器の中には、早期末(約7,500年前)に遡るものもあります。

B地区 斜面地から谷部にかけて^{ほったてばしら}竪穴建物2棟、^{ほったてばしら}掘立柱建物2棟が見つかりました。竪穴建物SH85は一辺約5mの方形竪穴建物です。検出面から床面まで深さ0.6mを測り、床面で焼土を検出し、建物内側と外側で排水用の溝を確認しました。斜面から雨水が流れ込むのを防ぐために工夫されていたことがうかがえます。埋土から6世紀後半の遺物が出土しています。掘立柱建物は、柱間で2間分のみ確認しました。



第2図 カンジョガキ遺跡地区割図



第3図 B・D地区遺構配置図



写真1 B地区1号横穴



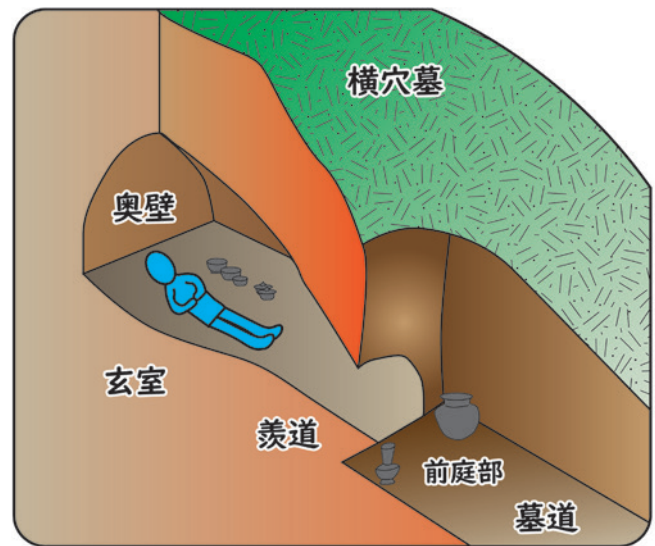
写真2 B地区2・4・5号横穴

また、調査区西側・北側の斜面地で横穴墓が2基見つかりました。西側で見つかった1号横穴は、長方形の平面形で玄室長3m、玄室最大幅1.2mを測ります。玄室内床面から追葬時に片づけられたと考えられる須恵器の杯蓋4点と高杯が1点出土しており、7世紀前半に築造されたものと考えられます。また前庭部に短い墓道が付き、東に向かって開口しています。

北側の2号横穴は、フラスコ状の平面形をしており、玄室長2.2m、玄室最大幅2.4m、羨道長1.6m・幅1.1mの規模を持っています。羨道の前面に土壇状に盛土した前庭部がつき、南東に向かって開口しています。玄室内から土師器皿2点と土師器高杯1点が出土し、入口付近では須恵器甕なども出土しました。遺物から7世紀中頃に築造され、最終追葬は火葬骨の出土から8世紀前半と考えられます。

2号横穴の西側に4・5号横穴があったようで、土層観察の結果、横穴が地滑りで流失したと考えられます。調査地外に続く西斜面付近に横穴と考えられる地形が観察され、開口部がそろうように並んでいた可能性も考えられます。

D地区 D地区は、B地区東側斜面を登った丘陵上及びその東側斜面にあたります。横穴墓1基、竪穴建物3棟を確認しました。尾根上では、湾曲する段を検出しており、削平された古墳の基底部と考えられます。また、尾根から東に少し下がった位置で、土師器壺が横向きの状態で埋まった土坑がみつかりました。古墳時代中期に営まれた土器棺と考えられます。周辺は近代以降の畑



第4図 横穴墓の構造



写真3 D地区3号横穴と縦穴建物

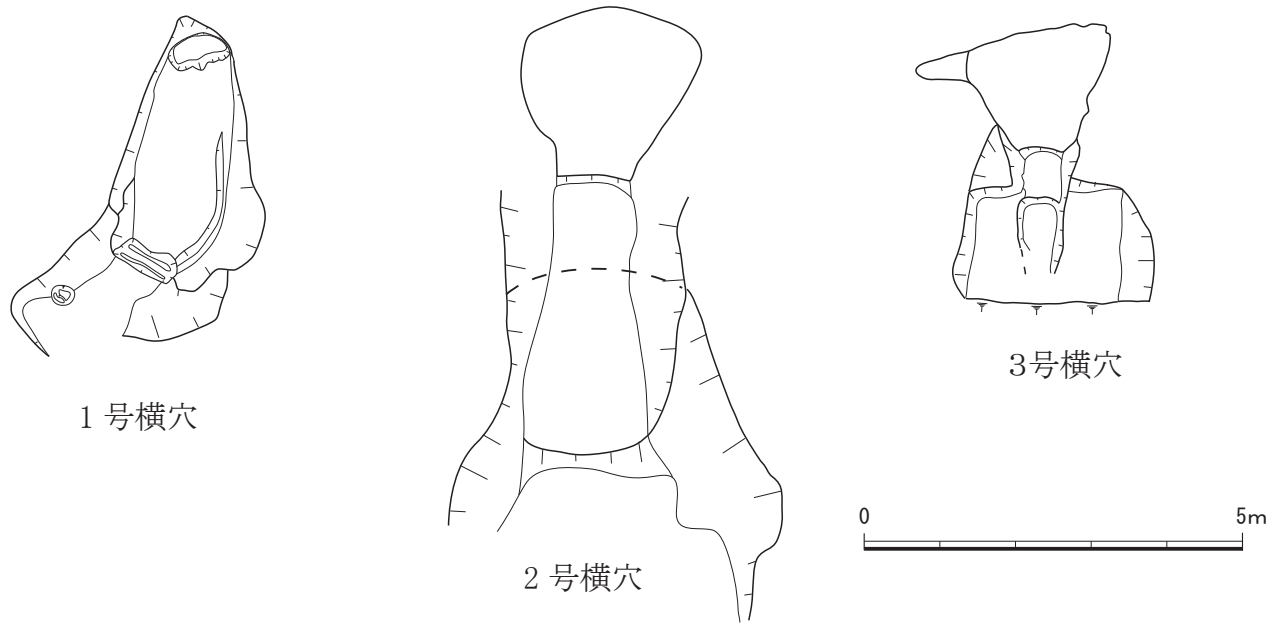


写真4 3号横穴遺物出土状況

の削平を受けており、そのほかの遺構は確認できませんでした。

東側斜面の中腹部分では、3号横穴とその下方で縦穴建物3棟を検出しました。3号横穴は、玄室がフラスコ状の平面形をしており、玄室長1.6m、最大幅1.85mを測ります。玄室前には、「コ」の字状の前庭部がついており、2号横穴のような羨道がありません。玄室からは須恵器の杯6点と蓋2点が出土しており、7世紀後半に築造され、火葬骨が出土する8世紀前半には最終追葬されたと考えられます。

3号横穴下方で検出した縦穴建物SH115は1辺約5mの規模で、焼土痕や柱穴が確認できました。また、床面の壁際に2本の周壁溝があり、建物が拡張されたことがわかりました。縦穴建物が、廃棄されたあとに、3号横穴が造られたようです。



第5図 B地区1・2号横穴、D地区3号横穴平面図

C地区 今年度調査を実施しているC地区でも飛鳥時代の竪穴建物および溝などが検出されています。溝からは、移動式かまどや土師器甕など多数の土器が出土しています。

3. まとめ

カンジョガキ遺跡B地区とD地区では、飛鳥時代から奈良時代にいたる横穴墓と飛鳥時代の竪穴建物などを検出しました。B地区・D地区では、住居の廃絶後に横穴墓が営まれていました。

様相のわかる1号横穴、2号横穴、3号横穴の特徴は次のとおりとなり、時代とともに横穴墓の形が変わっていったようです。

- ①1号横穴 長方形の玄室 短い墓道がつく 利用時期 7世紀の前半
- ②2号横穴 フラスコ形の玄室に羨道部がつく 利用時期 7世紀中頃～8世紀前半
- ③3号横穴 フラスコ形の玄室に前庭部が直接つく 利用時期 7世紀後半～8世紀前半

2号横穴、3号横穴では、火葬骨が確認されました。「続日本紀」には、西暦700年に日本で初めて火葬が行われたことが記されています。^{ささか}左坂横穴群でも8世紀前半の火葬墓が見つかっており、火葬の風習がいち早くこの地域に伝わっていたことがわかります。

竹野川右岸の大宮町三坂・^{みさか}周枳地区には、今までの調査で、南から^{ありあけ}有明横穴群、^{おおたがはな}大田ヶ鼻横穴群、^{さとがたに}里ヶ谷横穴群、^{ささか}左坂横穴群と数多くの横穴墓が存在することがわかっています。カンジョガキ遺跡はこれらの横穴墓群のさらに北に位置し、横穴墓が営まれる範囲がさらに北側に広がることがわかりました。また、横穴墓が竪穴建物などの廃絶後に営まれていることがわかりました。古墳時代後期は、横穴式石室を埋葬主体とする群集墳が築かれる時代ですが、大宮町三坂から周枳にかけては、群集墳は築かれずに、横穴墓群が古墳時代後期から飛鳥・奈良時代まで築かれています。これらの造墓集団がどのような形で、居住域と墓を営んでいたかを解明する手掛かりをえることができました。



写真5 3号横穴から出土した奈良時代の須恵器



写真6 カンジョガキ遺跡調査地遠景(東から)

宮津市史跡丹後国分寺跡の発掘調査

京都府教育庁指導部文化財保護課
桐井理揮

1. 天橋立、縦から見るか、横から見るか

現在の丹後郷土資料館の前に立つと、天橋立が端から端まで一望できます。今は股覗き^{またのぞ}で有名な天橋立^{あまのはしだて}ですが、縦方向に見るようになったのは近代以降。それまでは横から眺めるのが一般的でした。とはいっても、天橋立が端から端まで見渡せるスポットは実はほとんどなく、阿蘇海^{あそかい}西岸の平野部では、丹後国府の推定位置である安国寺遺跡^{あんこくじ}付近と、丹後国分寺跡付近だけなのです。

国分寺は、天平13(741)年に発せられた、「国分寺建立の詔」^{こくぶんじこんりゅう みことり}という命令に基づいて全国につくられた寺院です。これは、ときの聖武天皇^{しょうむ}が、地震^{ききん}や飢饉などの自然災害、天然痘^{てんねんとう}の流行などの不安定な社会状況を、仏教の力で治めようとした政策でした。この命令の中では「兼为国華 必択好処」(「国の華」である国分寺は、必ず良いところを選んで立てるよう)とうたわれています。丹後国分寺は、天橋立を望む、丹後国随一の「好処」だったのです。

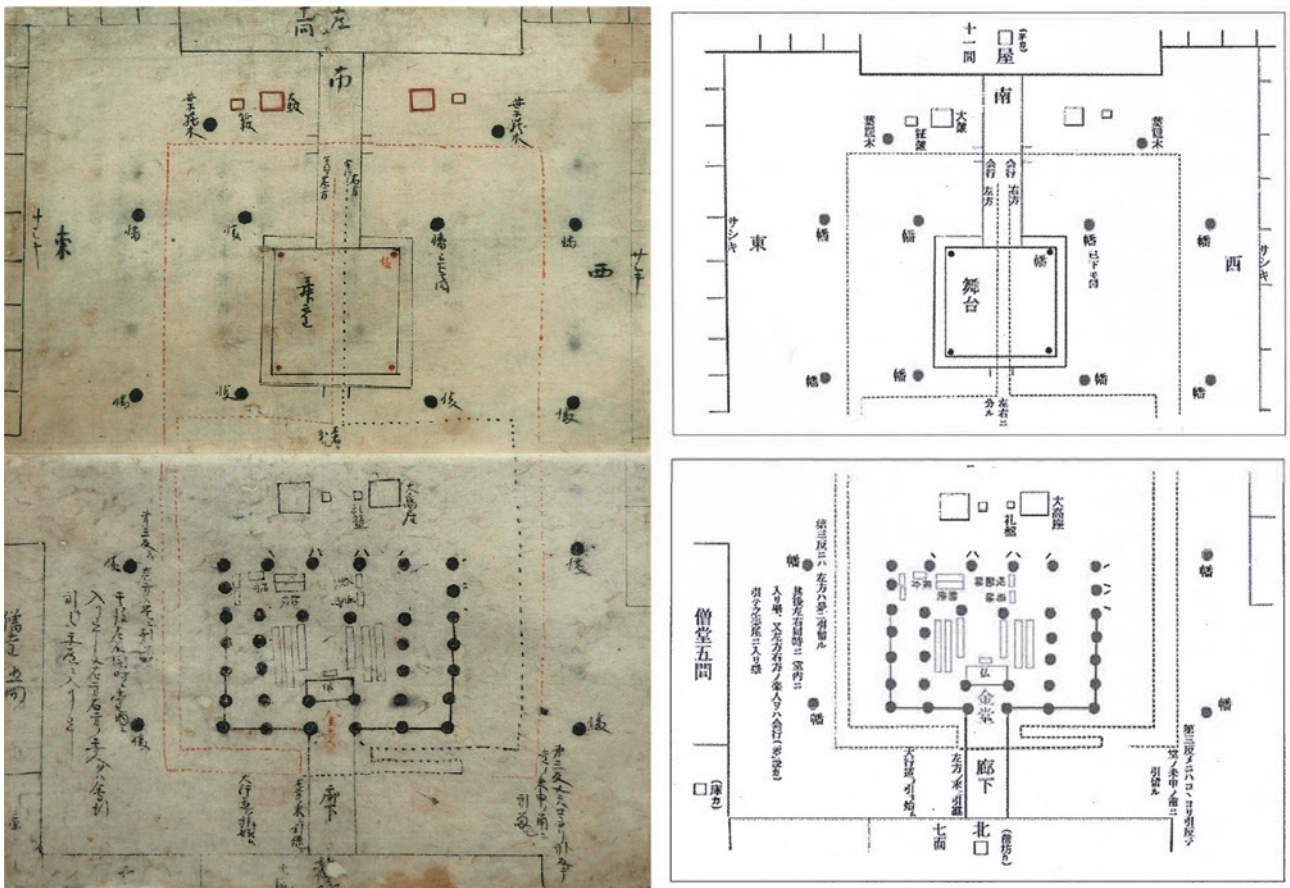


写真1 丹後国分寺跡と天橋立(令和4年12月撮影)

2. 丹後国分寺の歴史

国分寺の現在 現在、丹後国分寺跡に赴くと、史跡地内には巨大な礎石が2か所に整然と並んでいます。これは、まさに丹後国分寺の建物の基礎に使われていた礎石で、金堂跡(寺の本堂)と塔跡であることが分かっています。少し離れた場所に、門跡とされる礎石も2石あり、合計42石の礎石を目にすることができます。これらの礎石は、中世に作られた『丹後国分寺再興縁起』という史料に描かれている図と配置が一致することから、古代の国分寺の痕跡ではなく、中世に再建された国分寺の遺構と考えられています。

奈良時代の丹後国分寺 実は、奈良時代の丹後国分寺については、残された文献史料が少なく、当初から今の場所にあったのか、あるいは別のところにあった寺が移ってきたのか、よくわかっていません。ただし、今の丹後国分寺跡で、奈良時代から平安時代初期の瓦が見つかることから、少なくとも奈良時代末には今の位置に瓦葺きの建物がある国分寺が存在したと考えられます。



第1図 『丹後国分寺再興縁起』と解題(吉岡・林2023)

丹後国分寺の再興 奈良時代から鎌倉時代の丹後国分寺を伝える史料はほとんど残っていません。『丹後国分寺再興縁起』によると、鎌倉時代には、キツネやオオカミなどの住処となるほど荒廃していたようです。

その荒廃した丹後国分寺を再建したのが、律宗の僧侶、宣基上人せんきしょうにんです。『丹後国分寺再興縁起』をもとに再建までの様子を見ていきましょう。

宣基上人が再建のための資金調達をはじめたのは、嘉暦元かれき(1326)年3月18日です。翌2年4月15日には後醍醐天皇ごだいごから再建の許可が下り、同5月8日手斧始ちゆうなはじめ(宮大工の仕事始めの儀式)、9月4日に柱立はしらだて(初めて柱を建てる時の儀式)を行いました。途中、鎌倉幕府が滅亡するなど不安定な社会状況で、中断期間もありながら、建武元けんむ(1334)年4月7日に無事に金堂が上棟じょうとうとなりました。そして2日後の4月9日に丹後国内や大和から僧侶など67人が集まり、完成式典が行なわれました。この時再興されたのは、「五間四面堂舎一字、建立僧堂一字七間、僧坊二字、庫裏院一字」で、まだ五重塔は完成していませんでした。

当時、西大寺系の僧侶によって西日本各地の国分寺の復興が行われており、丹後のほか、周防・長門ながと(山口県)・伯耆ほうき・因幡いなば(鳥取県)・但馬たじま(兵庫県)・讃岐さぬき(香川県)などが西大寺の派閥に属することになりました。しかし、丹後国分寺のように、再建までの過程がこれほど克明にわかる事例はなく、極めて貴重な事例です。

中世の丹後国分寺を伝える史料としては、ほかに雪舟が描いた「天橋立図」があります。「国分寺」と書かれたお寺には、金堂、五重塔などが鮮明に描かれています。



第2図 『天橋立図』(出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>))、部分

雪舟が描いた後の丹後国分寺 その後、丹後国分寺は戦乱に巻き込まれていきます。永正3^{えいしょう} (1506)年から翌4 (1507)年にかけての^{いっしき}一色氏と武田氏・細川氏の合戦では、武田軍が府中にあった^{あみだのみね}阿弥陀ヶ峰城と^{いまくまの}今熊野城を包囲しており、国分寺にもその被害は及んだと考えられます。また、江戸時代前半に書かれた『国分寺略縁起』には、^{てんぶん}天文11 (1542)年、府中の町が乱で炎上し、^{がらん}伽藍の旧跡はことごとく田地となったと記されています。

宣基上人が再建して以降、16世紀初頭に雪舟が「天橋立図」を描くまでその伽藍を維持していましたが、その後まもなく戦災などで衰退していったのです。

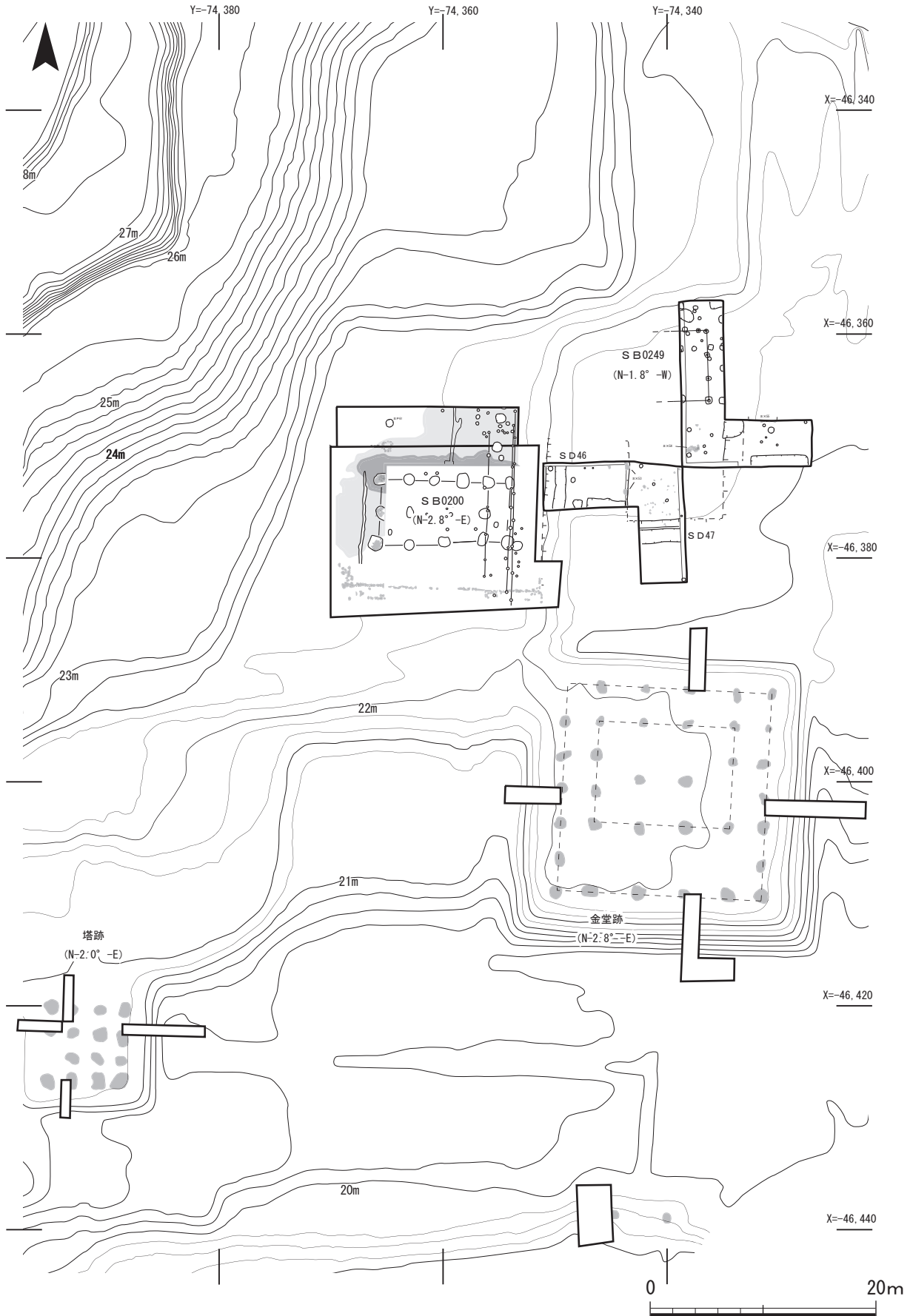
近世の丹後国分寺 現在、丹後国分寺跡の北東に建つ国分寺に伝わる記録では、天和3 (1683)年の洪水によって「本堂」「□重之塔」「護摩堂」「鎮守」「天王」「□(梵カ)鐘」「国分寺」「長良(老)坊」が破損したことが伝わっています。おそらく、山崩れにより寺の主要な建物は壊滅的な被害を受けたとみられます。江戸時代後期の『丹後風土記』には「今小堂残れり」と記されており、現在の同じ高台に規模を縮小して移設されたと考えられます。

3. 発掘調査の成果

以上のように、丹後国分寺では、現在残されている中世の礎石や、文献史料、絵図などから研究が進められてきました。ところが、史跡に指定されたのが昭和5年と古い時代だったこともあり、史跡内の発掘調査は行われてきませんでした。



写真2 現在の丹後国分寺周辺(奥の山は成相寺)



第3図 丹後国分寺跡の発掘調査地と見つかった遺構

そのような状況から、京都府教育委員会では、令和3年度から史跡内の状況を確認する調査に着手しました。今回は、特に大きな成果があった令和4・5年度の調査について紹介しましょう。

この調査では、「礎石建物」が見つかりました。礎石建物というのは、柱の基礎として石を使用する建築物のことです。地面に穴を掘って柱を埋める「掘立柱建物」よりも、丈夫で立派な上屋を支えることができる構造で、今でもお寺などで使われています。

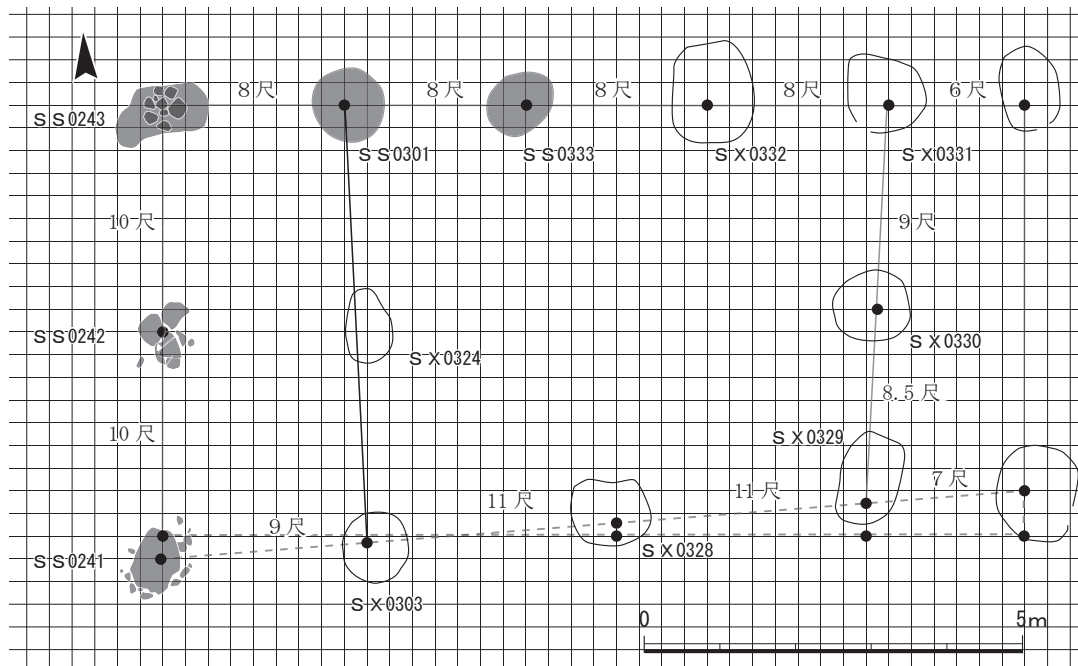
今回見つかった礎石建物は、東西38尺(11.4m)、南北20尺(6m)で、前面は柱が5本あるのに対し、背面は6本の柱があるという、少し変わった形の建物です。東側には、入口か庇のような構造があります。

礎石は西列と北列の合計5石は残っていましたが、他の部分では、礎石を抜き取った痕跡のみが見つかりました。この地点は昭和45年までは田んぼだったらしく、耕作の際に邪魔になる大きな石は抜き取られてしまったようです。運良く残っていた礎石は花崗岩を削って整形したもので、最も巨大な北西隅の礎石は幅が約1.3mもありました。

建物の前面(南面)と東側面は、頭の大きさほどの大きさの石を積み上げた石垣が見つかりました。このお寺は斜面に立っているので、低い方は盛土をしてかさ上げし、土が流出しないように石垣を組んだのでしょう。石垣に使われた石は花崗岩が少なく、近くの川で採取可能なチャートや砂岩が中心です。石垣には東西2か所に石で組んだ階段が見つかりました。普通、建物前面の中央に階段は設置されますが、この建物では中央には階段は見つかりませんでした。なお、石垣の角度や裾の位置は、南西にある金堂と揃えられており、2つの建物は規格性をもって配置されていることがわかりました。

また、石垣は、1m近い土砂で埋まっていたようですが、どうやら洪水や山崩れで一気に埋まったわけではなく、自然に土が溜り、ジワジワと埋まっていたようです。石垣を埋めていた土の中からは、寺の生活で使用したとみられる、中国産の青磁や国産の瀬戸物、素焼きの食器(土師器)が見つかりました。中には、中国産の茶入れや天目茶碗といった珍しいものもありました。16世紀の土器は含まれていないことから、15世紀末には石垣の大部分が埋まっていたと考えられます。

また、建物の北側では、瓦が大量に見つかりました。奇妙なことに、中世の瓦は1点もなく、すべてが8世紀後半(奈良時代後半)の瓦でした。これらの瓦が焼かれた時代と、建物が建てられた時代には、約500年以上の隔りがあります。中世の建物に再利用したものと解釈することもできますが、せっかく再建した建物にわざわざ500年以上前の中古の瓦を使うとは考えにくいでしょう。古代の丹後国分寺に使われた瓦が散乱していたのを、中世になり、1か所に集めていたのではないのでしょうか。これまで丹後国分寺では古代の瓦は2点しか知られていませんでしたので、非常に大きな発見となりました。



第4図 礎石建物 S B 0200 平面復元図(1 / 100)



写真3 礎石建物 S B 0200(北から撮影、右奥に金堂の礎石、左奥に塔の礎石が見える)

4. まとめ

今回の調査では、これまでまったく知られていなかった建物が、丹後国分寺跡の地中に存在することが判明しました。改めて雪舟の『天橋立図』（第2図）を見ると、金堂の裏手（北側）には、東西方向の切妻屋根の建物が描かれています。また、『丹後国分寺再興縁起』の指図（第1図）には、金堂の北に僧房（僧侶が生活する空間）が書かれています。この僧房は「7面」と書かれているので、今回見つかった礎石建物とは一致しません。

とすると、『丹後国分寺再興縁起』が作られた14世紀後半以降、雪舟が『天橋立図』を描いた16世紀初頭までに建てられた建物なののでしょうか。残念ながら、現状ではこの建物が何に使われたのかは分かりません。今後、さらに発掘調査が進んで、全体像が見えてきたとき、中世国分寺の姿はより鮮明に浮かび上がってくるでしょう。

また、これまで、古代の国分寺は最初、宮津以外の地にあり、平安時代に移ってきたという説もありましたが、奈良時代の瓦が大量に見つかったことで、当初からこの地に古代の国分寺があったことはほぼ確実となりました。今後、古代の国分寺に関わる建物や施設が見つかることにも期待が高まります。

現在、京都府教育委員会では調査の報告書を作成しています。その過程でさらに多くのことが分かってくるかもしれません。ぜひ、今後の調査・研究にもご期待ください。

参考文献

吉岡直人・林奈緒子2023「『丹後国分寺再興縁起』の研究」『令和4年度京都府域の文化資源に関する共同研究会報告書(丹後編)』京都府立京都学・歴彩館



写真4 大量に見つかった奈良時代の瓦



第 155 回埋蔵文化財セミナー資料

発行日 令和 6 年 8 月 4 日 (日)

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189



FB



X